OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代中国における感染症流行と中医
Author(s)	戸部, 健
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2021, 18, p. 41-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学歴史教育研究会
第129回例会（2020年7月18日）

近代中国における感染症流行と中医

戸部　健（静岡大学）

1

はじめに

2

- COVID-19と中国
  - 世界を席巻するCOVID-19
  - 確立した治療法やワクチンが存在しない
  - 中国でも様々な研究が実施されている
- COVID-19と中医（中医臨床編集部2020）
  - 治療には**中医（中国伝統医）も参加**
  - 政府が推奨する治療法のなかにも**中医の処方**が見られる
- 感染症の流行と中医
  - 中国の医療空間では西洋医だけでなく**中医も重要な役割を担う**
  - 治療が難しい感染症が流行した際も積極的な提言を行うことがある　※2003年の**SARS**の際も
  - 同様の事例は**近代**においても見られた

3

- 近代中国社会に感染症が与えた多面的な影響

①近代西洋医学の導入と**公衆衛生**の構築、**国家による社会への関与**が深化（飯島2000、2009、福士2010など多数）

②国家などによる介入に対する**社会からの多様な反応**（反発を含む）

→その背景も含め②に迫ろうという研究が近年進む（Sinn1989、路2010、蒲2016、福士2017など）

②のような検討をいっそう進めることで

- 近代中国社会が感染症（とりわけ未知の感染症）の流行をどのように受け入れたのか
- さらにそれがその後の中国にどのような意味を持ったのか

という問題を広い視野から明らかにすることができるのでは？

4

- 本報告の焦点
  - 近代中国の中医による**ペスト**と**コレラ**への対応
    →中医によって書かれたペスト論・コレラ論を読み解くことを中心に
    ※今回の内容について詳しくは以下をご参照のこと（戸部2017、2020）

5



1．近代中国におけるペスト・コレラの流行と公衆衛生行政の構築

6

- 近代中国におけるペストの流行（飯島2000）
  - 1890年代の香港での**腺ペスト**流行
    - 雲南起源、香港などから東・東南アジア、アメリカなどへ伝播
  - 1910～11年の満洲での**肺ペスト**流行
    - シベリア起源、鉄道を経由して満洲や中国各地に伝播
    - 満洲だけでも死者五万人を超える
  - その後も散発的な流行は続いた

7

- 近代中国におけるコレラの流行（MacPherson 1998）
  - インドのベンガル地方が起源、中国には**1820年**に入ってきたという説が有力
  - その後、毎年のようにどこかで流行、二十世紀に入ってからは、とりわけ1902年、1909年、1919年、**1926年**、1932年に大きな流行を起こしている
  - なかでも1932年の流行では、23の省で34,000人ほどの死者を出したという

8

- 中国における公衆衛生行政の構築
  - 20世紀初頭以降に本格化
  - 中華民国期になると日本をモデルに**国家レベルでの衛生行政の構築**が始まる
  - 国際連盟保健機関や極東伝染病情報局など**国際機関とも連携**
  - 不平等条約の改正に向け**「衛生救国」論**が叫ばれる
    →病気への対応は個人のためだけでなく（「養生」（Protecting the body））、国家のために必要（「衛生」（Defending the nation））（Rogaski 2004）

9



2．近代中国における医療空間

10

- 中国伝統医学vs近代西洋医学？―中西医の共存（Croizier 1968、Andrews 2014）
  - 第一回中央衛生委員会行政会議（1929年）で余岩（雲岫）から提起されたいわゆる**「中医廃止案」**（「医学ならびに公衆衛生の障害を一掃するための旧医学の廃止」と題する決議案）
    →1910年代から続く中西医論争が再燃
  - ただ、社会の多くの場において**中西医は共存**していた（例：上海の中国公立医院や紅十字医院など）
  - 患者にとっても西医は治療費が高価であったし、全幅の信頼を置けるものでもなかった
    →中医であろうが西医であろうが治してくれるところに行く、という**折衷主義**
    →中国人の身体観とも関係

11

- 民間信仰の神々に救いを求める人々
  - シャーマン（中医の知識がある者もいた）による宣託（**扶乩**など）に基づいた服薬
  - 1890年代の香港でも関羽によって示された処方箋が配布された（志賀市子2006）
  - 広東の一部地域では1890年代以降にそうした儀式を行う善堂が増えている（志賀市子2008）
- 中医改良の動き（李経緯1998）
  - 19世紀末以降の改革ムードのなかで、中医のなかにも自らの**生き残りをかけて改革を行う者**が出てくる
  - 学会の創設、雑誌の創刊、中医学校の設立などを通して中医界の刷新を図るとともに、中医の存立を危うくするような提案が行政から出た場合には、一致団結して反対した
  - ただし、中医のなかにも改革の方向性をめぐって意見の対立があり、1920年代以降にいてはおおまかに「廃止中医」、「中医科学化」、「中医保存」の三派に分かれた

12



3．感染症流行と中医（1）
ーペストへの対応

13

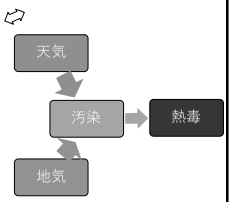
- 1911年　天津　　（戸部健2017）
  - 1月以来、東北地方からやってきた人々を中心にペストが発生
  - 4月までに67人が死亡
  - **中医も防疫活動の一端を担う**（防疫保衛医院など）
  - 衛生局や租界当局による厳しい隔離政策などに対しては民衆の不満が大きく、それに丁国瑞を中心とする天津の中医界人士が同調し、日刊紙『**大公報**』**において西医を支持するジャーナリストらとの論争**が勃発

    →中医の主張の背景は？

14

- 中医による腺ペスト論ー羅汝蘭『鼠疫彙編』
  - 中国でのペストの呼び名は「**鼠疫**」

    →中医の古典には見られない病名
  - 広東省でペストの治療に当たっていた中医・羅汝蘭（芝園）が、呉宣崇『治鼠疫法』（すでに失われている）を参考にして、1891年にペストの治療法についてまとめた『**鼠疫彙編**』を刊行（改訂を経て1897年に完成）
- ペストの病因
  - 呉宣崇『治鼠疫法』：地気に求める
  - 羅汝蘭『鼠疫彙編』：天・地の気が**都市のような汚染された環境下**で熱毒を生み、人がこの熱毒に感染する



15

- ペストの治療法
  - 体内の熱毒を排除し（**解毒**）、血液の流れを促進する（**活血**）
  - 具体的には、解毒活血湯を症状によって加減して服用させる
    - 連翹三銭　柴胡二銭　葛根二銭　生地五銭　当帰一銭五分　赤芍三銭　桃仁八銭、表皮の突起を除去して、叩いてつぶす　紅花五銭　川樸一銭　甘草二銭
  - 『鼠疫彙編』には、そのほか広東省や福建省で伝えられてきた様々な経験方も載せる

    →「**呂祖**乩示疫証方」、「**関聖帝君文昌帝君**乩示疫方」など扶乩との関係を有する処方もある

16

- 『鼠疫彙編』の継承と変遷―『鼠疫約編』（1901年福建）・『鼠疫抉微』（1910年上海）
  - 『鼠疫彙編』に自体はその後**中国各地に伝播**（一部海外にも）
  - 一部を改変したものとしては、著名なものに福建省閩県の中医・鄭肖岩が纏めた『鼠疫約編』、上海近郊の嘉定県の中医・余伯陶が纏めた『鼠疫抉微』がある
  - ペストの病因については『鼠疫彙編』を継承（ただし、余伯陶『鼠疫抉微』では、古い中医書である『諸病源候論』や『千金方』が言及する**「悪核」がペストと似ている**としている）
  - 治療法についても基本的に継承されているが、経験方については異動が大きい。すなわち、（1）**扶乩**と関係する処方が削除されている。（2）その他の経験方についても**中医的な裏付け**がされている。

    →民間信仰との関係を薄め、正統的な中医との関係を強調している

17

- 『鼠疫彙編』の継承？と変遷―丁国瑞『説疫』（1918年天津、1911年のペスト流行についても言及）
  - ペストの病因については『鼠疫彙編』と異同があるが、自然界にイレギュラーに発生した何らかの気が、**汚染された環境の影響**によりペストの伝染を媒介する物体を生み、人がその媒介物に感染するとペストを発症する、という点では両者は共通
  - 治療法についてもかなり異同があるように見えるが、新陳代謝を促進することで血脈中の毒素を駆逐するという考え方は『鼠疫彙編』の言う解毒活血とおおよそ一致
    - 「後に羅芝園先生の『鼠疫彙編』を閲覧し、光緒一六、七年〔1890、91年〕に広東で発生した大疫で、香港で鼠疫と称されたものは、やはりこの病症であったことを知った。〔かれは〕解毒活血湯でこれを治癒したが…〔それは〕私の処方と大同小異である」（『説疫』）
    - 「『鼠疫彙編』・・・のなかに掲載されている治療法は、〔丁が関わる〕各中医研究会が研究しているものと符合する」（丁国瑞「一誤豈堪再誤」『民興報』1911年5月18日）

18

- 丁の提唱したペストの予防法（一部）
  - 生活環境への注意：室内を**換気**すること、水源を**清潔**に保つこと、気候に合わせて衣服を選ぶこと、さっぱりしたものを飲食すること、夕飯は早めに摂ること
  - **衛生局の清潔法についても評価**：「天津衛生総局…などが〔提示した〕防疫の計画は些細な遺漏がなく、周到で妥当である。例えば、穢汚を徹底的に取り除いたり、衛生を重じたり、清掃して予防したりすることなどを施行するのが徐々に見られるようになっている」（丁国瑞「防疫之一助」『民興報』1911年2月16日）

    →中医のペスト論において**都市の汚染**というのがペストの重要な原因のひとつだったから
  - ただし、衛生局による**隔離の方法**や、**患者をしっかり治療しないこと**に対して、丁は痛烈に批判した

    →中医は中医なりに、ペスト治療について20年の蓄積があり、それを利用すべきと考えていたから

19



4．感染症流行と中医（2）―コレラへの対応

20

- 1926年　上海　　（戸部健2020）
  - 大規模な**流行性霍乱（コレラ）**が発生
  - 流行の状況（英軍医療部隊ロバートソンらの報告）
    - 3,140人の中国人、76人の外国人が感染、死者はそれぞれ747人と13人（実際はさらに多かった？）
  - 流行への対応
    - 各種防疫活動、西医の病院では食塩水注射を投与
    - **中医**も患者の治療や薬の配布などを行う
  - ある名医の死
    - 霍乱流行中に、上海を代表する中医であった**丁甘仁が亡くなる**と、日刊紙『申報』上で治療法をめぐって中西医間ないし中医同士で論争が発生
      →論争の背景にあったのは？

21

- 霍乱とコレラ
  - 霍乱とは？
    - 非流行性霍乱：急性胃腸炎や細菌性食中毒など
      →古くから中国で発生している
    - 流行性霍乱：**コレラ**
- 中医の対応
  - 代表例：王士雄（孟英、浙江海寧人、温病学者）**『霍乱論』**（1838年）
    →その増補版『随息居（重訂）霍乱論』（1862年、在上海）
  - 病因
    - 寒霍乱：昔からの霍乱「飲食の偏りによる者有り…」
    - 熱霍乱：汚染された環境によって生じた「臭毒」（＝穢濁の邪）によって生じるもの**→新しい霍乱**

22

- 治療法
  - いずれにしても病の原因である穢濁の邪を身体から排除することで、邪によって冒された脾臓と胃の機能を回復させる
    - **寒**霍乱：理中湯、五苓湯、四逆湯、藿香正気散など（**温熱薬**）
    - **熱**霍乱：桂苓甘露飲、燃照湯、連朴飲、蚕矢湯など（**寒涼薬**）
- 予防法
  - 家の大小を問わず**換気・掃除をして清潔**に保つ、家が密集しているところではいくぶん隙間をつくる、飲食に注意する（食べ過ぎない、こってりしたものを食べない、など）、など

23

- 『霍乱論』の影響
  - その後、江南の多くの中医が**熱霍乱を流行性霍乱（＝コレラ）**と認定し治療
    - 「該処では純寒にして熱がないものは、これまで十のうち一二もない。治療法は王孟英〔士雄〕の『霍乱論』の燃照湯、蚕矢湯を手本にして、症状に応じて加減した。」（「霍乱治療摘要」『衛生公報』1919年）
      →ただし実際に治療に効果があったのかは不明
  - また、**霍乱の性格（寒・熱）を見極めるのも難しく**、医療事故に繋がることも
    - 「剡東一帯では、熱霍乱が寒霍乱よりも多い。医者が不注意にも舌の色で判断せず四肢が冷たく伏脈であることをもって、陽が亡いとふうに誤って判断し温燥〔の薬〕でこれを治療し〔その結果〕人を殺める。」（「霍乱治療摘要」『衛生公報』1919年）
  - 他方で、徐子黙『吊足痧方論』（1860年）のように、コレラを**寒**霍乱とする中医もおり、状況はより複雑に…

24

- 1926年の論争での各者の意見（引用はすべて『申報』）
  - 西医の丁恵康：コレラの治療は**西医にまかせる**べきである
  - 中医に造詣が深い学者である章炳麟：今年の霍乱は**寒症**であり四逆湯（**温熱薬**）**で治療**すべきであり、症状が重い場合は西医にならって樟脳注射や食塩水注射を行うべき

    「王孟英〔士雄〕の輩は、霍乱は熱薬では治せず、熱薬を飲んだら死ぬと言う」
  - 中医の王一仁：今年の霍乱は**熱症**であり萸連解毒湯（**寒涼薬**）**で治療**するべき

    「四逆などの薬剤を投じるべきではない。もし誤ってそれを用いたり、あるいは西医の方法で食塩水注射をしたりしたならば、熱に苦しんで寝られず、死ぬほど口が渇き、・・・息絶える。」

    →結局、決着つかず

25

- とりわけ中医の間で議論が活発になった理由

  ①霍乱の性格（**寒・熱**）を見極めるのが難しかったため

  ②中医によって**西医との距離**が異なっていたため

  →章炳麟は「中医科学化」に、王一仁は「中医保存」の立場に近い

  →ただし、中医保存の人々ももはや西医を完全否定する人は、とりわけ上海では少ない

  ③**中医改革の方向性**をめぐって、王士雄など明清以降の中医の成果を認めない動きがあったため

  →章炳麟はこの立場で、日本の漢方を高く評価する

  ④劣勢に置かれるなかで**中医の存在感**を示す必要があると、多くの中医が感じていたため

  →そのため、中医間の論争は両者の決定的な対立にはならず、のちに章炳麟も王一仁も中国医学院という中医教育施設の設立に協力している

  →以上のように、この論争には、当時の**中医改革の議論**が強く影響しており、決して後ろ向きな姿勢ではなかった

26

おわりに

27

- 中医による各種感染症研究
  - もちろん近代西洋医学の観点からすればおかしな治療法もあったが、**改良自体は常になされていた**
  - 鼠疫と霍乱については、いずれも**都市の汚染**が重要な病因のひとつとされたため、**予防法**（環境衛生の改良を含む）については比較的妥当なものも多かった
  - 他の感染症についても検討することで、当時の中国における医療空間の変容を知ることができるのではないか？

    →ちなみに上述した上海の名医・丁甘仁は猩紅熱の研究でも著名

28

- 中国の医療空間の不足を補う存在として重要
  - 西医一人が担当すべき患者数（Yip 1995）
    - アメリカ（1930年）：800人
    - イングランドとウェールズ（1927年）：1,490人
    - 中国（1929年）：90,000 ~ 112,500人
  - 1950年頃でも西医数は10,000〜20,000人（当時の中国の人口は約5億）

    →ちなみに中医は500,000人ほど　（Croizier 1968）
  - 中国の医療空間を成立させるためには、**中医のあり方が極めて重要**

    →他方で、西医が増えたからといって、中国人の身体観が変わらない限りは中医の存在する場所はある（ナショナリズムとの関係も）

    →今後も**近現代中国における中医の動向**をより深く検討する必要があるのでは？

29

報告中に言及した文献

（日本語）

- 飯島渉『ペストと近代中国ー衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、2000年。
- 飯島渉『感染症の中国史ー公衆衛生と東アジア』中公新書、2009年。
- 蒲豊彦「隔離の恐怖ー1894年香港のペスト体験ー」村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』京都大学人文科学研究所、2016年。
- 志賀市子『中国のこっくりさんー扶鸞信仰と華人社会』大修館書店、2003年。
- 志賀市子「中国広東省潮汕地域の善堂ー善挙と救劫論を中心に」『茨城キリスト教大学紀要 I、人文科学』42巻、2008年。
- 中医臨床編集部「新型コロナウイルス感染症中医はいかに立ち向かっているのか？」『中医臨床』第41巻第1号、2020年。
- 戸部健「天津　1911年ー鼠疫をめぐる中医の社会史ー」永島剛・市川智生・飯島渉編『衛生と近代ーペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会ー』法政大学出版会、2017年。
- 戸部健「1920年代上海における霍乱流行と中医」『史林』103編1号、2020年。

30

- 福士由紀『近代上海と公衆衛生ー防疫の都市社会史ー』御茶の水書房、2010年。
- 福士由紀「上海　1910年ー暴れる民衆、逃げる女性ー」永島剛ほか編前掲書、2017年。
- 吉元昭治『道教と不老長寿の医学』平河出版社、1989年。

（中国語：ピンイン順）

- 李経緯主編『中外医学交流史』長沙、湖南教育出版社、1998年。
- 路彩霞『清末京津公共衛生機制演進研究』武漢、湖北人民出版社、2010年。
- 志賀市子「1894年穂港地区的鼠疫流行与扶鸞的乩示」『香港中文大学道教文化研究中心通訊』第4期、2006年。

（英語）

- Andrews, Bridie, *The Making of Modern Chinese Medicine, 1850-1960, Vancouver*, University of British Columbia Press, 2014.

31

- Croizier, Ralph C., *Science, Nationalism, and the Tensions of Culture Change*, Cambridge, Harvard University Press, 1968（難波恒雄ほか訳『近代中国の伝統医学ーなぜ中国で伝統医学が生き残ったのかー』創元社、1994年）。
- MacPherson, Kerrie L., 'Cholera in China, 1820-1930: An Aspect of the Internationalization of Infectious disease', in Mark Elvin and Liu Ts'ui-jung eds., *Sediments of Time: Environment and Society in Chinese History*, Cambridge, Cambridge University Press, 1998.
- Rogaski, Ruth, *Hygienic Modernity : Meanings of Health and Disease in Treaty-port China*, Berkeley; Los Angeles; London, University of California Press, 2004.
- Sinn, Elizabeth, *Power and Charity: The Early History of the Tung Wah Hospital*, Hong Kong, Hong Kong ; New York : Oxford University Press, 1989.
- Yip, Ka-che, *Health and National Reconstruction in Nationalist China: The Development of Modern Health Services, 1928-1937*, Ann Arbor, Association for Asian Studies, Inc., 1995.

32